

Title	我々は物にどのように出会っているか?
Author(s)	玉地, 雅浩
Citation	臨床哲学のメチエ. 2006, 15, p. 21-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8469
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

我々は物にどのように出会っているか？

玉地 雅浩



10月29日に洛星高校で1コマ70分間の授業を担当する機会を得た。

テーマは「我々は物にどのように出会っているか？」とした。

昨年も授業する機会があった。体験型の授業では可能な限り全員が同じ課題を経験した上で議論した方が、参加者の興味を引き対話を維持しやすいことを経験していた。そこで今回は全員が参加できる課題を用意した。

また今回の洛星高校の授業に中心となって関わっている臨床哲学の教員や院生との打ち合わせで、特異な現象のみを扱っても参加者から関心が得にくかったり、仮に得られたとしても、そこから議論を開始するのは難しいのではないかと考えたからである。そこで参加者全員で対話できるようなテーマを設定し、それに合わせた課題となるよう工夫した

のである。

課題

1. 全員で椅子から立ち上がってもらった。次に、全員壁に向かったまま可能な限り近づいて座ってもらった。二人一組になり一人が立ち上がり、その様子をもう一人が観察した。それぞれが立つ役と観察する役の両方を行った。
2. 二つ並べた机の上に立ってもらった。次に足が浮かず、かつ膝が曲がらない範囲で左右に重心を移してもらった（左右に体を揺らす感じ）。そして、今度は一側に衝立を設置した。

先の壁

を前にした立ちあがりでは壁が近いことにより動きを制限するほうに働いたが、今回の課題で



は動きを制限すると思われた衝立にむしろ持たれるくらいまで傾いてきた。この課題は以前山梨温泉病院に勤務されていた作業療法士の柏木氏が考案された課題である。結果は氏

が論文で書かれたものからの予想に反した。

本人に確認すると「衝突があると安心して
もたれられるから」という答えが返ってき
た。今度は反対側の机を取ったところ「机が
無いほうはコロッといたら終わりだが、こ
っちは壁があるのでいざとなったら持たれ
ばいい」と答えが返ってきた。

こ こに1. の課題とは違う壁の意味があ
った。普通、壁には仕切り、天井を支
える、防音、もたれる、部屋を作るなどの意
味や役割があるが、身体があまりにも近づき
すぎると動きを制限してしまうことが課題
1. では明らかになった。が、課題2. で
は逆に動きを引き出すことが確認された。た
だ、どちらも本人たちがはっきりと知覚され
たものだけでなく、知覚していることを自覚
していなくても、動く中で周囲の
状況によって動き方が変化するこ
とを体験してもらったのである。

3. 次に壁伝いにビデオカメラを
覗きながら歩いてもらった。
見るということが単に目だけ
で行われるのではなく、身体
全体が関与していることを実
感してもらいたかった。この
時先程まであまり参加してい
なかった人も興味を示した。

授 業を終えてみてのように70分という
時間で3つの課題は対話の時間を考慮
すると多すぎるかもしれない。この点につい
ては授業の様子を報告してくれた濱田さんが
指摘してくれたように授業の最初にレジメな
どを用意した方がいいかもしれない。

今回授業で体験した課題について、あるい
は授業全般において感じたことを踏まえて考
察したものを『臨床哲学』7巻に投稿する予
定である。最後に昨年に引き続きワクワクす
る意見をたくさん出してくれた洛星高校の皆
さん、場を提供して下さった洛星高校並びに
栗栖さん、そして授業にあたって議論してく
れた武田さん・榎本さん・紀平さんありがと
うございました。

(たまちまさひろ)

